

続・ 珈琲の思い出 34

鈴木優子

ぐっすり眠って翌朝目が覚めた優子はしばらくベッドの中で昨夜の和樹との甘い時間を反芻していた。隣では夫の義弘が相変わらずイビキをかきながら熟睡している。

やがて、優子はいてもたってもいられなくなり、携帯を開くと、和樹に急いでメールした。

件名「昨日はありがとうございました。」

本文「和樹さんへ。昨日はありがとうございました。美味しいお料理もごちそうさまでした。ところで、私、かなり酔っぱらってしまつて、和樹さんに失礼なことを言つたみたいですが、和樹さんは覚えていますか？」

すると、優子のメールを待つていたかのようにすぐに返事が来た。

「昨日はこちらこそありがとうございました。僕も酔っぱらつていて、よく覚えていないなあ・・・」

なんて愛しい人なのだろう？

これはバツチり覚えていて。ということではないか!?

和樹のことがずっと好きだった、と告白して、その返事が「どうしてもっと早く言つてくれなかったの？」で額にキス。

つまり、和樹も優子のことが好きだ、ということだ。

「今、何していますか？」

「今日は息子は友達の家へ。家内はネイルサロンとやらに行つてしまつて、僕は今日家でしばらく一人です。」

「えーっ!? そうなんですか?? 和樹さんちに遊びに行つちやおうかな??」

「おいで。近いよ。うちはS町。」

「また、そんなあ。そんなこと言われたら、困ります。理性と感情が闘い中。」

「だからおいでよ。」(続く)